
呼ビ 声

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呼ビ 声

【著者名】

佳生

Z0328B

【あらすじ】

自分の姿を変えるほど、『彼女』は死を恐れていた。「生まれ変わらって、信じるかい?」思いがけない一言で、彼らは幸せを得る。

第一話：『彼女』ノ存在（前書き）

分からん。 そう思つヒトも、いるかも知れません。 いないかも知れません。 そんなお話だつたりします。

第一話：『彼女』ノ存在

そのホコリの奥に眠っていたのは、美しい少女の姿をした化け物だった。

透き通る結晶の中に眠る少女。

その下で封印されている、六本の鋭い足を持った、怪物。

少年がそのホコリに入ってしまったのは、十一年も前。

少女がその瞳で少年を見つめたのも、十一年前。

怪物が目覚めたのも、十一年前。

少年から青年になった彼は、剣を制御出来るほどに成長し、そして立ち上がる。

償い切れる訳はない。

だから、せめて。

あれを倒そう。

† †

少年は、一人の、一匹の少女に恋をした。

あどけなく、美しい。

悪魔的に、強い少女に恋をした。

少女は壊す。

全てを壊す。

少年にとって、心安らぐ場所も、責め苦にしかならない場所も、全て壊した。

けれども、だからこそ、少年は少女に恋をした。

愛しい愛しい少女。

腹を好かせれば食料を持ってきて、汚れれば雨を降らせてやつた。

しかし、少女が微笑む事はない。

それは、少女の命を狙つものがいるからだ。

だから。

少年は、少女を守るために刃を手に入れた。

少女の手のように、長く鋭い刃を。

人の首を狩るという、死神の鎌を。

第一話・辻り着ク

運命は、その青年等を導いた。

† † †

日本、とこゝの、小さな島国がある。

剣を携えた金髪碧眼に眼帯の青年は、この国の生まれではなかつた。

そして、彼と対峙する青年もまた、異国の民だつた。

長い白髪、それにより隠れた面立ちは秀麗だが、生きているのが不思議なほど白い。

「君は……誰？」

消え入りそうな声で、青年は問う。

その手には、大きな鎌が握られている。

「ヴァイだ」

答えた青年、ヴァイの手には、少し大きめの剣が。

「君は……ヴァイ。僕は、リサイス。君は、『彼女』を殺しにきたの？」

表情を変える事無く、淡々と告げるリサイスに、ヴァイは剣を握る手に力を込める。

彼は、強い。

「君も、そななんだろ？『彼女』をイジメル、悪い奴なんだろう？」

今までに、何人の人間がここにやつてきたとも知れぬのに、その

回数だけ戦いがあったはずなのに、ヴァイの立つやうは、やつとは思えないほど整っていた。

戦いで崩れた様子が見受けられない。

もし、あの化け物が一度でも出てきたなら、一瞬にして崩れているだろう。

「来た奴ら、殺したのはお前か……？」

「…………うん、そう」

呆気なく答える彼の声音には、悪気が少しも見えない。

「だつて『彼女』は何もしてないのに……君たちが殺そつとするから。正當防衛でしょ？」

それがさも当然の事のように、リサイスは言つたが、ヴァイはそつとは考えられなかつた。

「正當防衛？　あの化け物に正當防衛もなにもあるか！　何もしないなんぢ、じつちだつて手は出さねえよ！　現に俺の村は」

と、声を荒げたヴァイの喉元に、リサイスの鎌が添えられる。

対峙していた姿はそのままに、服の裾と髪の毛だけが田を泳いでいた。

「黙つて」

わんわんと余韻を残すヴァイの声の中、リサイスの声が静かに響く。

「嘘。嘘吐かないでよ。 何もしなかったの？ だったら何で君の村は滅んだりしたの？」

「…………それは、あれが暴れたから……」

「何もしなかったのに、暴れたんだ？」

リサイスの聲音は一様にして感情が籠もっていない。

ただ事實を確認して、結果を出しているだけのようだ。

「…………」

「もし君の言つてゐる」ことが本当なら

ヴァイの隻眼を興味なさげに見つめながら、リサイスは言い放つた。

「とつぐの昔に、この国は滅んでいるだろ? わ」

ヴァイは、答えられない。

何もしていない。

確かに自分は何もしていないのだ。

でも、他の奴らは?

そんな考えが頭を過る。

しかし、それを降り扱うよにして、記憶が浮かび上がった。

『人はね、優しくされたら嬉しいものなんだよ

白い、そこらに生えているような安っぽい花を一輪持つた少女。

金髪に碧眼という、ヴァイと同じ特徴を持つ少女は、件の化け物によつて命を奪われた。

親しかつた少女。

初めて、花を送った少女。

それは幼い頃の戯言でしかなかったが、ヴァイにとっては、数少ない記憶の一つだった。

「…………許せるわけねえだろ」が

ぱほり、と駄いた彼の言葉。

リサイスは相変わらずの表情で聞いている。

「もしも、てめえの言つことが本当でも、だからつって、俺の故郷がなくなつたことにほかわりねえんだ！」

「…………逆恨みじやないか」

「つるせえー！」

あくまで見下したような、冷静沈着な反応に、ヴァイの感情温度が沸点を越す。

「あの化け物が居なかつたら、俺は…………」

『人に好きだと思われること、それだけで人はね、生きていくんだよ』

「わ、……君は悔しいんだね。でも、『彼女』には触れさせないよ。僕は『彼女』が好きだから」

ちつ、と音を立てて喉元を通り過ぎてゆく、鎌。

ヴァイはそこに熱い痛みを感じながら、顔をしかめた。

そのときだった。

『……』

音なのかどうかも分からぬそれが、あれの出現を如実に表していった。

リサイズの背後。

絶世の美を持った少女が存在していた。

しかも結晶の中で眠っている訳ではない、自らの足で立った少女がだ。

「…………イティス？」

振り返つたりサイズ表情は窺い知れないが、聲音は僅かに震えていた。

『　〃… つけ ……た』

断片によつて構成された言葉。

その言葉に、ヴァイに向き直つたりサイズの表情が強ばつた。

「…………じゃあ、こいつが

「こいつもだ。やつと会えたな、化けものめー」

剣を構え直すヴァイに、何を思ったのか、少女イティスが軽やかな足取りで近づく。

止めようとしたりサイズの手が宙を泳ぎ、それと同時にイティスがヴァイの目の前で立ち止まつた。

仇敵の目の前で、少女は立ち止まつたのだ。

「イティスツ……」

「う、うあつー」

少女に向かい踏み出したリサイスと、剣を高らかに持ち上げたヴァイ。

どちらが速かったかといつと、一瞬の差で、リサイスが速かった。

速い、といつても、ほんの一瞬。

少女の腕には、赤い線が描かれた。

驚いたような表情の少女を高みに座らせ、リサイスはヴァイと再度、対峙する。

表情は、眼力のみで人を殺せそうなほど、怒り。

「どうして? 『彼女』は君を待っていたのに」

「?」

「僕は『彼女』が好きだ。だから、見守りつと想つてたのに……なのに、なのに……!」

「何言つてんだよ」

「ムカつく……お前、『彼女』を踏み躡つたな! 僕の愛しい『彼

女』の心を…』

「…?」

信じられない風圧とリサイスの瞬発力に、ヴァイは受けとめたはずなのにダメージを受けていた。

「許さない、許さない許さない許さない許さない…」

呪咀のよつよつづく言葉に、ヴァイは舌打ちをして攻撃を受けとめる。

反撃をする機会を伺いながら、ちらりと少女を見た。

+

+

少女は、絶望でいっぱいだった。

『氣の遠くなるほど長い眠りから覚ましてくれた、この世界で唯一、自分にとつてよい事をしてくれた人間に、切り付けられた。

何もしていらないのに。』

絶望が込み上げてくる。

あの醜い感情が込み上げてくる。

少女は、少女は。

その絶望に、飲み込まれた。

†

†

その異変に気が付いたのは、リサイスだった。

振り向きもしなかったのに、少女の変貌にいち早く気が付き、そのせいで重大なミスを犯してしまった。

「余所見てんじゃねえつ！」

「イ……あつ！？」

ガードはしたもの、ヴァイの懇親の一撃が、側頭部に決まる。

壁に叩きつけられたリサイスは、一瞬意識を失った。

それを確認して、ヴァイが正面を向くと それはすでに存在していた。

巨大な、六本足の化け物が。

ヴァイは、あまりの事に言葉を失つたが直ぐに剣を構え直す。

少女は、まだ自分を見ている。

じっと、見ている。

「…………だから、なんだってんだ」

仇を前にして、ヴァイは大きく剣を振りかざし、腰を落とす。

ずっと前から決めていた。

倒すなら、一撃。

「…………」

ゆっくりと近付いてくるそれに、ヴァイは容赦なく斬撃を引くれる態勢を整える。

少女は見つめている。

じっと、あの時、少年だった人間を。

＋ ＋

一瞬とんだ意識を掴み直して、リサイスは顔を上げた。

頭はくらべりして、視点が定まらない。

それでも懸命に目を凝らすと、イティスがヴァイに近付いていっているのが分かった。

「殺されかけたのに…まだ、あいつに…どうして？ 僕の方がそいつより君を何倍も何倍も、ずっとずっと好きなのに！ なのに…ムカつく！ 絶対にイティスは殺させない…」

歯を食い縛り、立ち上がったリサイスは剣を高らかに持ち上げた。アイを見て取り、彼を睨んだ。

「イティスは、僕だけいればいいんだ！」

それは願望。

リサイスはそれを口にし、地面を蹴った。

†

†

鮮血が舞つた。

なんとも表現しがたい悲鳴が、ヴァイとリサイスの鼓膜を震わせる。

ヴァイの田の前には、リサイスの姿があった。

「イティス、逃げて」

血飛沫を浴びて、朱に染まった顔を少女に向か、リサイスは微笑む。

その血は、ヴァイのものではない。

傷は負つてしまつたが、イティスのものでもない。

「逃げて。ほら。ちゃんと怪我、治すんだよ。そしたら迎えに行くから。絶対絶対、見付に行くから」

言いながら、リサイスは自らを貫いている剣を堅く握り締める。

これ以上、少女を傷つけさせないために。

『……』

キチ、と、リサイスの背後でイティスが後退する気配がして、それに反応し、ヴァイが剣を引き抜こうとする。

しかし、剣は動かない。

「……お前は『彼女』を傷つける。だから、行かせない」

「お前……」

対峙したまま、リサイスはイティスの気配が完全に消えるまで、ずっと立ち続けていた。

ヴァイも、そのまま。

「…………ちっ」

ふいに舌打ちをしたヴァイは剣から手を離し、同時にリサイスの肩を支える。

すでに意識を無くして青ざめているリサイスが離した剣が、大きな音を立て傷口から滑り落ちた。

「馴鹿じゅねえのか、こいつはよ」

ぶつぶつといいながら、傷口に布を巻き付け、ヴァイはリサイスを背負い立ち上がった。

第二話・巡り合フ

例の化け物が住んでいた山は、『女郎蜘蛛の山』と呼ばれていた。

そしてその山の麓の村宿でリサイスはほんやりと日を覚ました。

視線を泳がすと、水盤を持った乙女と日が合つた。

「傷、大丈夫ですか？」

「……」

尋ねられ、リサイスは答えなかつた。答えられなかつたと言ひまつが正しい。

こんな言葉をかけられたのは何時、ふりだつ。

「お腹空いてません？　お兄ちゃんに言ひて、何か作つてもらいますね」

笑顔で部屋を出でいく黒髪黒眼の彼女を見送り、リサイスは起き上がる。

傷は、地の底で這いずるような痛みを訴えている。

しかし、持ち前の治癒能力の高さで、深刻な事態からはすでに脱した後のようだつた。

「……よつ。起きたつて？」

「君は……そつ、ヴァイ」

「ひむ

罰が悪そうに現われたのは、リサイスに深い傷を負わせ、そしてティスを仇としている青年ヴァイだつた。

「…………」

「…………」

空気が止まり淀んでいくような嫌な沈黙がありました。

だが、そう思つてゐるのはヴァイだけのようで、リサイスはとつと、ぼんやりと窓の外を眺めている。

見えるのは、『女郎蜘蛛の山』だ。

「『彼女』は……大丈夫かな」

「一。」

ポツリ、ともらした彼の一言に、ヴァイは何かを言い返そうと口を開きかけた。

が、それを言う前に部屋の扉が大きく開く。

「大丈夫？ 起きたんだって？」

「…………あ、吉竹兄^{よじたけ}」

「おや、ヴァイも来てたの？ あ、吉野^{よしの}が呼んでたよ。力仕事だつて」

現われたのは、先程の乙女と同じ、黒髪黒眼の男だった。

優しい笑顔が印象的な彼は、リサイスの前に丸太の椅子を持つて、盆を差し出す。

ヴァイが部屋を出でていったのを確認してから、リサイスはそれを受け取った。

「うーん。君の口に合うかどうか分からんだけれども、野菜たつぱりだから、消化にはいいと思うよ」「みうつよ

「…………」

数秒、微笑む彼の表情を観察し、リサイスは極々自然にそれを口に運んだ。

警戒心など微塵も感じさせない動作に、吉竹は少しばかり驚く。

そして

「……美味しい」

リサイスは小さいながらも、確かにそう呟いた。

「『彼女』の口にも、あつだらうか……」

「君のこと、ヴァイから聞いたよ。山で『彼女』と一緒に暮らし
てたんだってね」

微笑む吉竹に、リサイスは首を左右に振った。

「山だけじゃない。ずっと前から。海と一緒に渡るくらい前から、
僕は『彼女』と一緒にいた

「そつか、随分前から一緒にいたんだね」

頷く吉竹に、リサイスは無言を返す。

リサイスに合わせて、あの少女を『彼女』と呼ぶ吉竹に、リサイスは何の疑問も感じていないうだ。

むしろ彼にとつては、『彼女』を『化け物』と呼ぶほうが疑問に値するらしい。

「君は、とても彼女が好きなんだね」

言われて、リサイスは吉竹を見る。

あまりにも真直ぐなその視線に、一瞬、吉竹は言葉につまつた。

と、リサイスの手が震えだす。

「そう、僕は『彼女』が好きだよ。愛してるって言えるくらい好きなんだ。……でも、『彼女』は、『彼女』は、僕じゃなくて、あいつを探してた。ずっとずっと前から。僕が『彼女』と出会つ前から。『彼女』は僕なんかじゃなくてあいつだけを見てたんだ！なのに、なのにあいつは……『彼女』の気持ちなんて知らないくせに！ どうしてあいつなんだっ！ 僕の方が、ずっとずっと

「落ちついで、リサイス。うん。分かったから、分かったから。大丈夫」

「何も、知らないくせに……」

ギリギリと握り締めた木の器が、バカリ、と音を立ててひび割れた。

俯いたリサイスの手から、吉竹は器を取り、彼の頭を軽く撫でる。

「何も知らないのは当たり前なんだよ。ずっと一緒にいた君と違つて、ヴァイは小さい頃に、一回余つた切りなんだから。君だつて、ヴァイがどんな思いでここまで来たか、知らないでしょ?」

「……」

吉武の言葉に、リサイスは何も返さなかつた。

また窓の外を見て、『彼女』の身を案ずるかのように、僅かに瞳を細めていた。

少し離れた場所にある納屋から、ヴァイはじやが芋の詰まつた袋を二つ抱ぎ、吉野と並んで歩いていた。

途中、深刻な顔をして吉野が口を開いた。

「あの人、すごい怪我でしたよね」

「……ああ、リサイスの事か?」

「うん」

心配そうな面持ちで、吉野は続ける。

「……山の、怪物にやられたんじゃないかなって、お兄ちゃん、言ってたんですよ」

「……」

「どうせアリサ野は、リサイクル物が多かったと思つてゐるやうだ。

吉竹が誤魔化したのは、たぶんヴァイと吉野を思つてだらう。

ヴァイも、吉野も、何となく自分らの気持ちに気が付いていた。

「ヴァイセンは、怪物を倒したが、海の回りに迷ひかけっこです

「…………おめでたす」

歯切れ悪く答えたヴァイに、吉野は歩く歩調を速めてヴァイの数歩前に行く。

ヴァイはその背を見つめながら、ぽんやりと考える。

帰る、といつても、向こうにはもう、故郷は存在しないのだ。

でも。

『そつか、ヴァイは強いもんね。大丈夫だよ』

思い出が、ある。

面影がある。

「いのれこ、帰つひや「のせここ」か」

と、不意に吉野が立ち止まり、クルツとヴァイロ回を直つた。

「あの山から、ひやさんじいはまつてあたひー。」

吉野の瞳が、田の光で輝いた。

黒こくく映える、田の光。

ヴァイは、危うく袋を落としきつてなつて、せつと正氣を取り戻した。

「帰つてきつてくれるなひ、帰つちやつちもこですつー。」

そつ笑つて、吉野は宿屋へ駆け戻つた。

残されたヴァイはとこつと、じめいへんせんやつした後、何事もなかつたかのように宿屋厨房にての姿を消した。

‡

夜になり、リサイスは月を見上げながら、『彼女』について思っていた。

寒くはないだろうか。寂しくて泣いてはいないだろうか。傷は痛んでいないだろうか。

「…………お前、まだ起きてたのか

「病人は早く寝ろ、とでも言つの？」

「…………」

月明かりを後光に振り返ったリサイスは、そのまま消えてしまいそうだった。

果てしなく冷たい瞳を向けるリサイスに、ヴァイはそれを見返すことが出来ない。

蔑むような瞳。

軽蔑するような敵意。

「君はひ、『彼女』をなんだと思ってたの？ 僕が『彼女』を助けたとき、すごい驚いてたよね。『彼女』には、助ける価値なんてないと思つてたの？」

「……それは」

言い返せない。

「『彼女』はか弱いか弱い女の子なんだよ。本当に自分に正直なね」

「……俺、お前があの姿のあれしか知らないと思つたんだよ。ち。まさか、化け物の格好でも助けるたあな」

「何言つてんだよ。『彼女』の本当の姿は、あの女の子の方だよ

「……はあ？」

「僕は別に幻術なんかかけられてないよ、残念だけど。君は『彼女』が獲物を油断させるために、女の子の姿をしていると思ってたんだろうね。今までの奴もそうだった。けど、違う。逆なんだ。『彼女』は生き残りたいからこそ、あんならざるをえなかつた。

君は、『彼女』を知らなさすぎた。だから君は、平気で『彼女』を傷つける

「……」

口を挟むことを許さないよう、リサイスは静かに話す。

そう、話しているだけ。

「……」この、吉竹が、そう言つていた。君が『彼女』を知らないのと同時に、僕も君のことを知らないと

「吉竹が？」

小さくため息を付き、リサイスはヴァイに向き直り、首を傾げる。

どうやら、ヴァイの話を聞きたいようだ。

自分は話したのだから、とこいつて、瞳を細める。

ヴァイは大きく息を付くと、直接床にあぐらをかいた。

「……前も言ったけど、俺があれを倒すのは、村の仇討ちだ。まだそれだけじゃあ、いくら俺だつてここまで来ない。俺がここまで来たのは、“俺があれを起こした”からだ」

「君が、彼女を？」

「そ。たまたま入った洞窟に、あれが居たんだよ。寝てた

「……」

がりがりと頭を搔く、ヴァイに、リサイスは相変わらずの表情で話を聞いている。

反応するべき点も、さほどない。

「びびつて見てたら、あれが起きてなあ…走つて逃げた。それから直ぐに、故郷がなくなつて、あー、うん……アリスも死んで…。やっぱ、仇討ちだな」

「ふうん」

一人で納得したように頷く、ヴァイ。

興味なさそうに相づちをうつたりサイズは、足をベッドからおろし、椅子にでも腰掛けるかのようにして、ヴァイを見下ろした。

「それで、君は……まだ『彼女』を殺そつとするの？」

「…………やうだつたら、お前じつすら。」

「殺す」

笑う事も出来ずに尋ね返したヴァイに答えた、リサイズの答へには、主語が無かつたが、それは用意に分かる。

もじこじでやつあつたら、ヴァイはリサイズに勝てないだろ。

言つなれば経験。

致命的な経験値の差がそこにはあつた。

旅の中で、幾多の危機を乗り越えたヴァイだが、それにしたつて『彼女』を今まで守り抜いてきたりサイズには適わない。

先日の手合せは、本当にまぐれだ。

「昔の思い出の為に戦つ君は凄いと思う。けれど、僕は今、今の彼女を守るんだ」

そう言つたりサイズは、窓の外を見る。

あの山のどこかに、『彼女』がいるのだろう。

「君は、薄らいで逝く過去の為に、今を捨てるの?」

何もかも。

リサイスといつ青年は、何もかもでヴァイの上を行っていた。

やつへつと立ち上がる彼に、ヴァイは慌てて、同じく立ち上がる。

「つこてへる気?」

はつきりと嫌そつな顔をして言つたリサイスに、渋い表情を返し、ヴァイは視線を逸らす。

「…………まあ」

「…………来るなら来るでこなさ、『彼女』に攻撃したら、消すか

「…………」

隠す事もせずに立て掛けられていた鎌を手に持ち、リサイスは、ふと眼下に見える道を見た。

「なんだ、あいつら……！」

「まさか」

十数人単位で人が歩いて行く。

方向は、山。

「全員、殺す

物騒な咳きの後、一瞬にして眼下の彼らは、姿を消した。

しかし、それはヴァイにそう見えただけであつて、傍らのリサイスの手には、血糊べつたりな鎌が握られている。

「…………」

「心配しないで。残骸はどこにもないから」

「…………」

彼はもう、人間の枠の中で暮らすには、余りにも見境がなすぎたのだ。

何も言い返せない。

彼はきっと、人間とは暮らせない。

最終話：クルクル廻ル

『彼女』は怯えていた。

知らない人間が、自分を取り囲み、牙を剥ぐ。

恐くて、痛い。

それが嫌で嫌でたまらないから、彼女は

+

ヴァイがそこに足を踏み入れた瞬間、そこにいた大半の人間の姿が

消え、命が散つた。

呆氣なさすぎて、驚く事も出来ない。

化け物を退治しようと勇んでいた男たち。

恐怖に慣れ続ける少女。

大勢より、一人の少女を守る青年。

そして、そして。

「死にたくないなら、帰つたほういいぞ」

その全てに動じなくなつた青年が一人。

「意地張つてたら、粉々にされちまうぞ」

あきれ顔で諭すように言つヴァイの隣で、リサイスは驚愕の面持ちで『彼女』イティスを見上げていた。

「なんて、ひどい傷……誰？　『彼女』泣かせたの誰？」

余りに恐ろしかったのか、未だに落ち着かず、周囲を破壊し続けている『彼女』から視線を外したりサイズが、幽鬼のごとき動きで逃げ帰ろうとしていた彼らを睨む。

「どいつもどいつもどいつも……全員、殺して」

「やめろ。今はあっちだろ」

振り上げられた手を掴み、ヴァイは『彼女』を指差す。

自分の付けた傷は既にない。あるのは今し方の傷ばかり。しかも、かなり深い。

「どうする。すげえ暴れてつけど

「動きを止めないと……傷がひどくなる」

「……具体的に、どうせつて止めるんだよ

この場合、相手が疲れるまで待つ、という選択肢は却下だ。

と

「おやおやおや。大変だ」

「…？」

「君…？」

逃げ帰つた彼らと入れ代わりに、場違いな人物が、扉の前に立つていた。

宿で見た時と同じ、そのままの格好。武装など一つもしていない彼は、ただ柔軟に笑つている。

「吉竹兄…」

「こんなところで一体何を？」

そう言い掛けたヴァイの横を、鋭い槍が通り抜けた。

それは『彼女』の腕。

突き刺さり抉れた地面は、先程まで、吉竹が立つて居た場所だ。

しかし彼は今、その三歩横に立つている。

「やっぱり、分かるんだね。もう何十年も前だけど……僕の事は嫌いかな、イティスちゃん」

「…！」

少女に向かい、語りかける彼は、笑顔を通り越した笑顔だ。

自分達の知っている彼ではないようなきすらしていく。

「あの時、君を封じたのは間違いだつたかな？」

自嘲の笑いが聞こえた。

「君なら、乗り越えられると信じていたのに」

次の瞬間、リサイスの鎌が吉竹の首をとらえた。

しかしそれは、吉竹に紙一枚の間を残して止まっている。

殺すつもりで振るつたリサイスの表情は、しかし、無表情のままだ。

と、そんな状況であつても、吉竹は狼狽える事無く、一つの話をした。

「少年は少女に恋をした。彼女は可憐ではかなげで、とても魅力的だつた。少女は少年が好きで、だから一人は仲が良かつた。

ところがある日、少年は死んでしまった。

少女はそれを自らの責任だと思い、己すら豹変をせてしまう。それ

は余りにも可哀相なことだと、誰かが少女に安らぎを与えた。

次に目が覚めたとき、『彼女』の目の前には少年がいた。少年には中のいい少女がいたが、今度は少女が死んでしまった。

それで『彼女』は、一つの錯覚を起こしてしまった訳だ。

“昔死んでしまった少年はそこにいる”

本来彼の傍らに居るべき少女と自分を重ねてしまつたんだよ。

：

……その少年は、自分の求める少年ではないと分からずにね

つらつらと、比喩ではないはずなのに、そう聞こえてしまつ語り口調で、吉竹は言つ。

そして唐突に、

「“生まれ変わり”って信じるかい？」

と、リサイズに向かい投げ掛けた。

リサイズは、

「僕は『彼女』が好きだ。それが答えなんだろ?」

と、何ら臆する事無く答えた。

それが当たり前であるように。それ以外は認めないとでも言つよう

。」

「その通り。だから僕もね、少し位なら、昔の力を使えるわけだよ。ヴァイ、少し剣を貸してくれるかな」

「あ？ ああ……いいけど」

今一、吉竹の話は理解し切れていなかつたが、ヴァイは言われるがままに、剣を差し出す。

「これね、昔、僕が使つてたんだよ」

言つた吉竹は、軽がると剣を持ち上げ、『彼女』に向けた。

それに驚異を感じたのか、イティスは瞳を見開き、その腕を振り上げた。

「縛つー！」

風で髪が舞うほどとの距離で、その腕は、強制的に動きを止められた。

「…………ふう。 剣、ありがとうね。 それから、ヴァイ、君今、自分は役立たずだ、とか思つてるかもしけないけど、そんな事ないよ」

身動きのとれなくなつた『彼女』にゆづくつと歩み寄るツサイスをバックに、吉竹はヴァイに語りかけた。

「君がいなかつたら、僕はここに来なかつたし、彼は永遠自分の気持ちを押さえ付けてたううね。……それに、家の妹は一生お嫁に行かないだうう」

「……」

シリアルスな様子を一瞬にして破壊するような事を、吉竹は平氣で言つてのけた。

何かを言い掛けたヴァイは口を半開きにしたまま、硬直する。

そんなヴァイに小さく笑いながら、吉竹は言つたのだ。

「生まれ変わつて、信じる?」

「は?」

「家の妹、あつと白い花が似合つと想つんだ」

そう肩を竦め、有無を言わぬヴァイの腕を掴んで、そこから立ち去る吉竹。

彼に引きずられながら、ヴァイは何となく思い出していた。

初めて花を送った少女の事を。

† †

「もう恐くないよ、イティス」

自由を取り戻したと同時に少女の姿を取り戻した『彼女』を、リサ
イスは抱き締めていた。

あやすよつとして抱き抱えられた彼女は、小さく震えている。

「大丈夫、恐くないから。もう一人にはしないよ。『逃げて』だなんても言わない。そうだな、今度はどこにいこうか？　もう一度海を渡つて、誰も知らないところに……」

『……』

「？」

イティスの小さな背中を撫でながら、リサイスは小さな囁きを聞いた。

小さな小さな囁きに、彼は首をひねる。

「この場所がいいの？　でも、ここは崩れて」

見るも無残な有様を曝すそこを眺めたりサイスの腕のなか、イティスは彼の服を皺になるくらい握り締め、もう一度言つた。

『……』

リサイス自身がその意味を、イティスの言つた意味で理解したのは、それからずつと後の事だった。

† ‡ † † ‡ †

あの山には神様が住んでいる。

かつて『女郎蜘蛛の山』などと呼ばれていた、その山は、いつから
か神の山となっていた。

見事に化け物を退治した勇者の剣は、麓の村宿に飾られている。し

い。

異国勇者と、心優しき術師は、白銀の神と共に、化け物を退治し、
神の娘を助けだした。

そんな伝説が、その村には残っている。

それは遠い遠い、昔の物語。

最終話・クルクル廻ル（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0328b/>

呼ビ 声

2010年10月28日04時05分発行